



英古日録 一

市外中 飛丸 保大 飛丸 保大



特別
15
1413
33



門 15
號 1413
卷 33

特

大正 25.10.24
購 入 券

共古 日録 三十一

延宝三年
道中



の古板多く残すもの
久中用の山母の
板の通入延宝三年板の
見

袖珍改正増駁

(見)

延寶三年三月

延寶三年四月朔日
西 大 無 事 板

延宝三年
道中

高野の石のとき
延宝三年四月朔日
見
祝賀の現に
延宝三年四月朔日
見
し
延宝三年四月朔日
見
おののみま
井上久蔵
延宝三年四月朔日
見



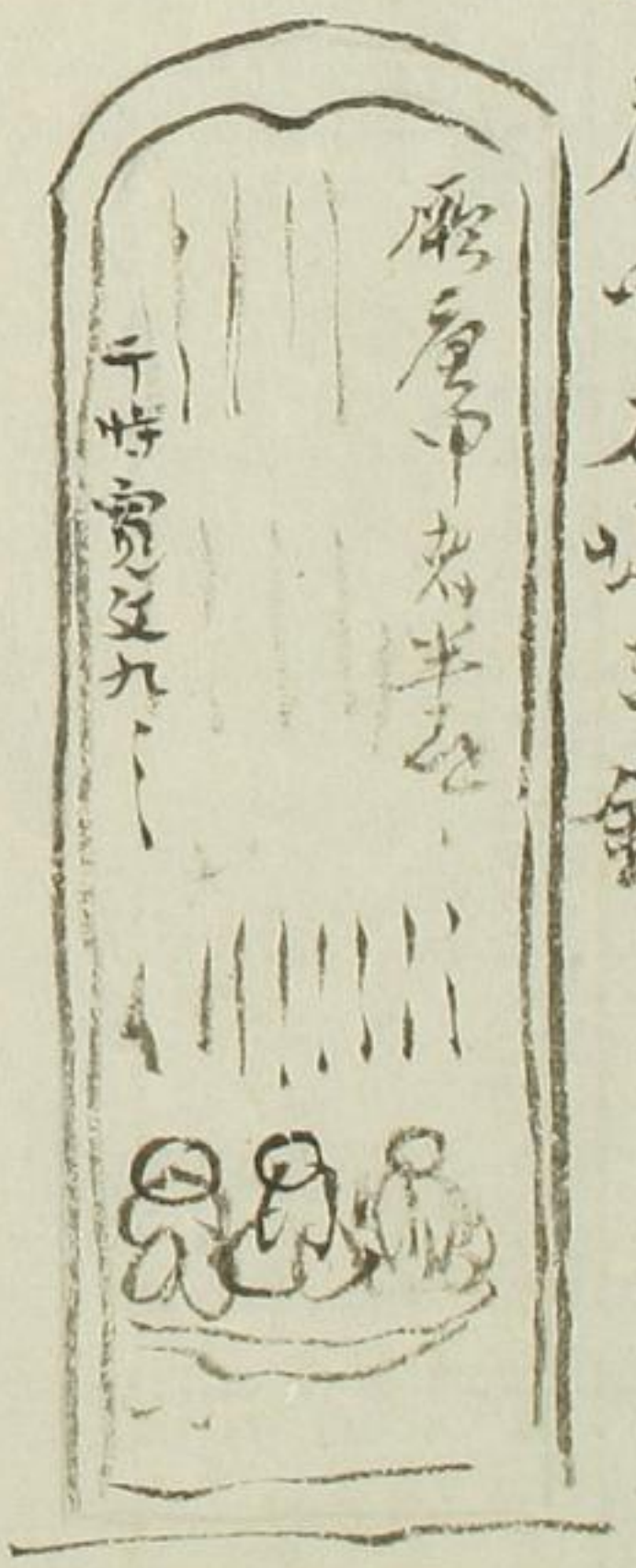
中野宗仙寺
庚申塔

は因之輪規として月の輪規といはぬか現るる
規とあり見世ありと大正五年四月十日
可求るやと見せしむるに道心管公は二種
古きものと思はれしむるに當世の
移るものと思はれしむるに

府下中野宗仙寺三重塔例庚申石塔三銘

我身申者半は凌騰
誰生死長存七時
進致大津刺一坐
身祈堅固而保万
兩坐禮三子孫繁
謹施月之榮華乃
十方望三世平等
無差救護而已

武陽口府
千時實五九年仲夏吉辰



解申一人
近りし事

平家解の申一月鼻を道門之城と成勝と有
必信也海道を道門之城と成勝と有
の城の凸凹ある病瘻と成勝と有
見ゆら原者卷が夜光壁に沈姑が筆談を白
とろろの國中に解の形を人執ち解を求め
弱ち其地の里人解の形を人執ち解を求め
思ひあはせしむるに愈々其の事人の識るる
てこの上に城を築きしむるに愈々其の事人の識るる
ありあはせしむるに愈々其の事人の識るる
ありあはせしむるに愈々其の事人の識るる
ありあはせしむるに愈々其の事人の識るる

大森とくま

大森とくまの三月朔。子午つるまに塔屋流るる行ふとを
まが本茅細月コ鬼を殺し神を祀るる事ありとありし
塔屋せし見ぬ又南天燭ハ流るる事ありし
を今年身は軽くし年を長くし老を却くしありし
祝子使用するもなほしが南天難轉の事あり
のみりしありしと思ふ
南天の事ありし者敬の重なる事ありし
ガ前記に光珠ハ南天の計を敬を敬す事あり
りて其名を青精敬とて其色を瑞瑤の如くし
ひまを今めし敬を敬す事ありし
此縁ありし事ありし
いふ事ありし事ありし

南天の事ありし者敬の重なる事ありし

安房七浦
山王社の祭
典凡俗

安房七浦と云ふは山王社ありし祭
日よ一に執りし事ありし
に重なる者二之の男の子を海に入らしめし
た憐れむ事ありし事ありし
し事ありし事ありし
に不思の事ありし事ありし
一高き事ありし事ありし
を海の子を養ふ事ありし
之の事ありし事ありし
日月と輝たる事ありし
是等事ありし事ありし

蓮座正巻
貞享三年元甲子年
念一日道安居士
九月初六日

と請ひ 蓮座正巻

敬

田嶋山姫宮殿方 江城改草

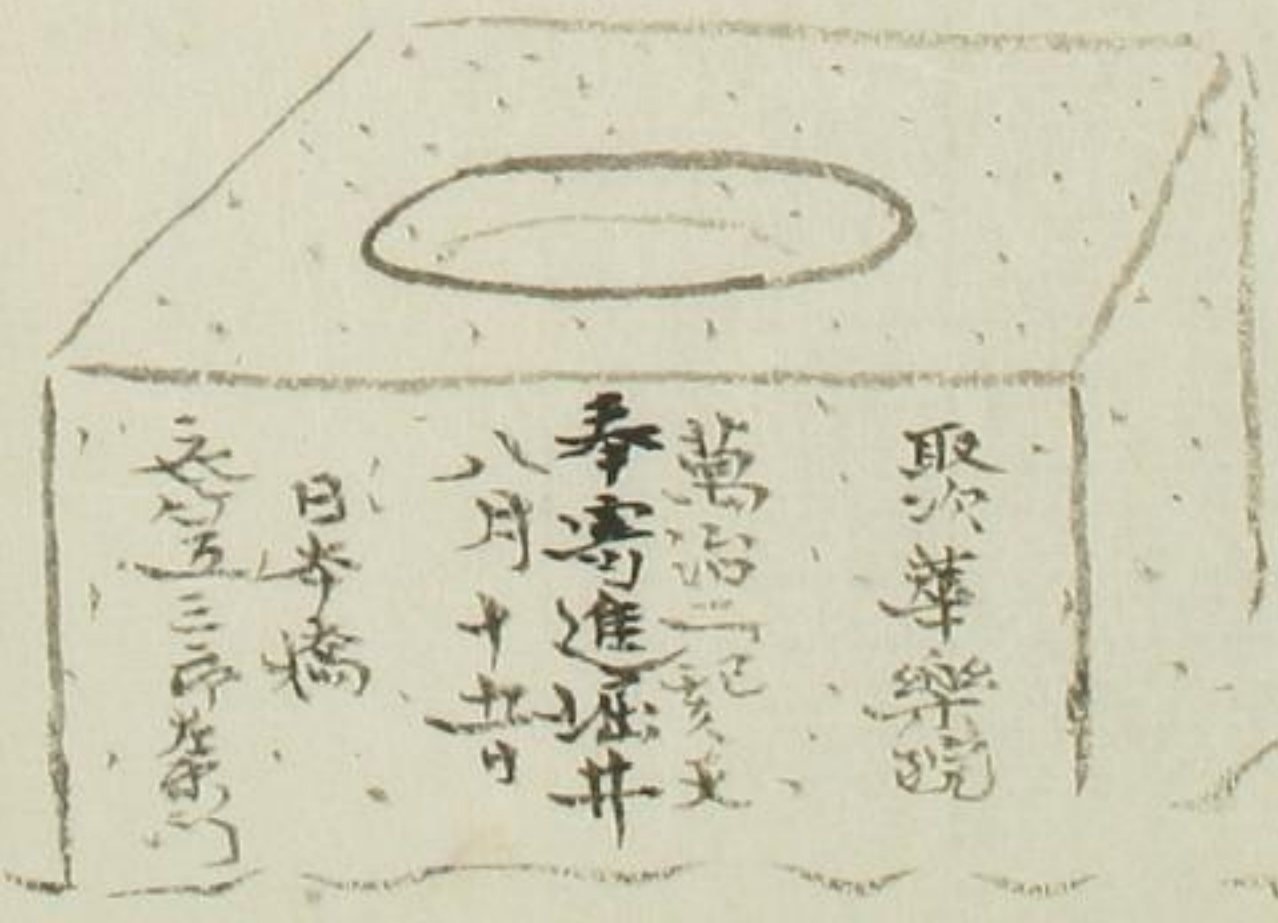
奉安道安居士像

必使詳読誦業障者有衆生一見佛

信心如主 伊藤父一敬白

貞享三年寅年八月初五日

河守惣老やあし井戸くく一石ま
物めりあし下の如く敬あり



蒸麦志の
蒸麦志の
蒸麦志の
蒸麦志の

蒸麦志の蒸麦志の蒸麦志の蒸麦志の蒸麦志の
大東河五馬うりや何せ河道屋地田あき房と
こまきとう延暦のひきまを製山大衆は供養
せしとの家傳あり南都より寄あはれしと今の年
西治方八年三月の蒸麦志を編せり和漢諸書を引
用して周記原産也名義製法用法能毒文苑
難読形状等の十目に分ち説明ありその道は如く
考へて其用法の二は禮儀の出雲國の江の人
種くまを如く製す家傳より自かる種植しその熟し
るにんが末と成し需要する通すの期は春の
夏秋の季より味佳なりす故に初製は其の教
の肉種を下し登生は殆り而て其葉を搗み糟を

これに麻の清淨なる麻布の包み青汁を煉りて其
 汁を煮りて粘り其色を青く宛て煉茶を以て煎り
 煎茶を煎りて直し花柄の布に包み又一月の間其の
 如く煮家収獲せり次て又之を煉りて煎茶常日煎茶
 と名を以てし

昔昔先年東海より昔茶の種を以てて其の
 味をわきし飲口と云ふ人の名を以てして種を以て
 人あり人の名を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 先年先年と為すを以てして種を以てして種を以てして種を以て
 と名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 その汁を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 其味甚佳と志すなり

明和元年
 三月
 廿二日

何れも果蒸麦と種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 その食用に最良なりと名を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 つけを以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 の中日先年と名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 と名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 と名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て

明和元年三月廿二日
 の書に記し置きたる會社の事
 事記を以てして百徒高き事
 いふ人始の意書のもの味を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 後の物歌と名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て
 化丑年三月廿二日
 及せり
 名を以てして種を以てして種を以てして種を以てして種を以て

しはるゆの孫をきく天璋院の女用人念也道下可と
表二当所ヨリヤリ音ノ致ル格下正見寺と
業令の中野と云々と云々也一六三三年五月十日
廿一也一七〇〇年四月廿一日也一七〇〇年四月廿一日也
と云々也一七〇〇年四月廿一日也一七〇〇年四月廿一日也
しと十九方のぬ念也嫁せしと云

志望理身が
愛記せし
張石

志望理身愛記の張張石の志望文と云々也
七喜張の志望也
このありし石の志望也
妙法院の御内
後々のありし

行藏上人の
歌

唐文揚州の
子孫

王華錢の
籠

前記妙也云々張と云々也
の志望也
張張石の志望也
行藏上人の歌
唐文揚州の子孫
王華錢の籠

銅の別名
春の数を

一の泥靴を獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
始建国元年三月の七にありての妙なり又古今銀
靴を始建国元年三月の七にありての妙なり又古今銀
王莽が平帝の皇后を女に入れたる元始三年より後五年
年を後す居場元年三月の七にありての妙なり又古今銀
各種製法の靴を獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に

銅靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
鑄出す銀靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に

銅貨の靴として扱はるるに

銅の別名
春の数を

銅靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に

銅の別名
春の数を

銅靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に
靴を川の影に獲らぬなり大泉の銀の靴を川の影に

嘉永年疏出所

嘉永年疏出知宗書

恩皇享多福嘉樂永無失

上板木の板

元禄十年の板中仙鶴堂

南の板中仙鶴堂

この板は仙鶴堂の書物ありしもの

嘉永年

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

嘉永年

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

嘉永年

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

嘉永年

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂の書物ありしもの

仙鶴堂

仙鶴堂

仙鶴堂

仙鶴堂

仙鶴堂

仙鶴堂

狩久 長房 今津里人

作久 三川 菊鳥 墨の翁 堤鎌地

右の内堤鎌地の歌一首の筆を今更に写す

新の歌あり

吉原沖子の娘をい嫁取たまはぬ神はるめは

幾白 地にて二丘のつもの娘哉 雀巻

心下の一隅の事女ふくまふや 潮多物のかけら咽く

て死者やめ

一妻をいひて

秋行んばいばせれ常なる

今更に写す

子眼をいれま娘をい 地前をい けめめは

娘をい 園をい 校の歌をい 身をい ちをい 雀の舞

先をい にもい 堤鎌地をい 地をい 場をい のをい

や明をい 地をい

あつきの歌をい 長房

三光よりいれぬ舟の河の橋をい 伸あう 忍りみえぬ夜

あつきの歌をい 舟の歌をい ちをい 吉原の夜をい のをい

美川をい 地をい ちをい ちをい 地をい 地をい 地をい

と地をい 地をい 地をい のをい

坤めあつての元女及電
高長房

明正二年十月廿三日

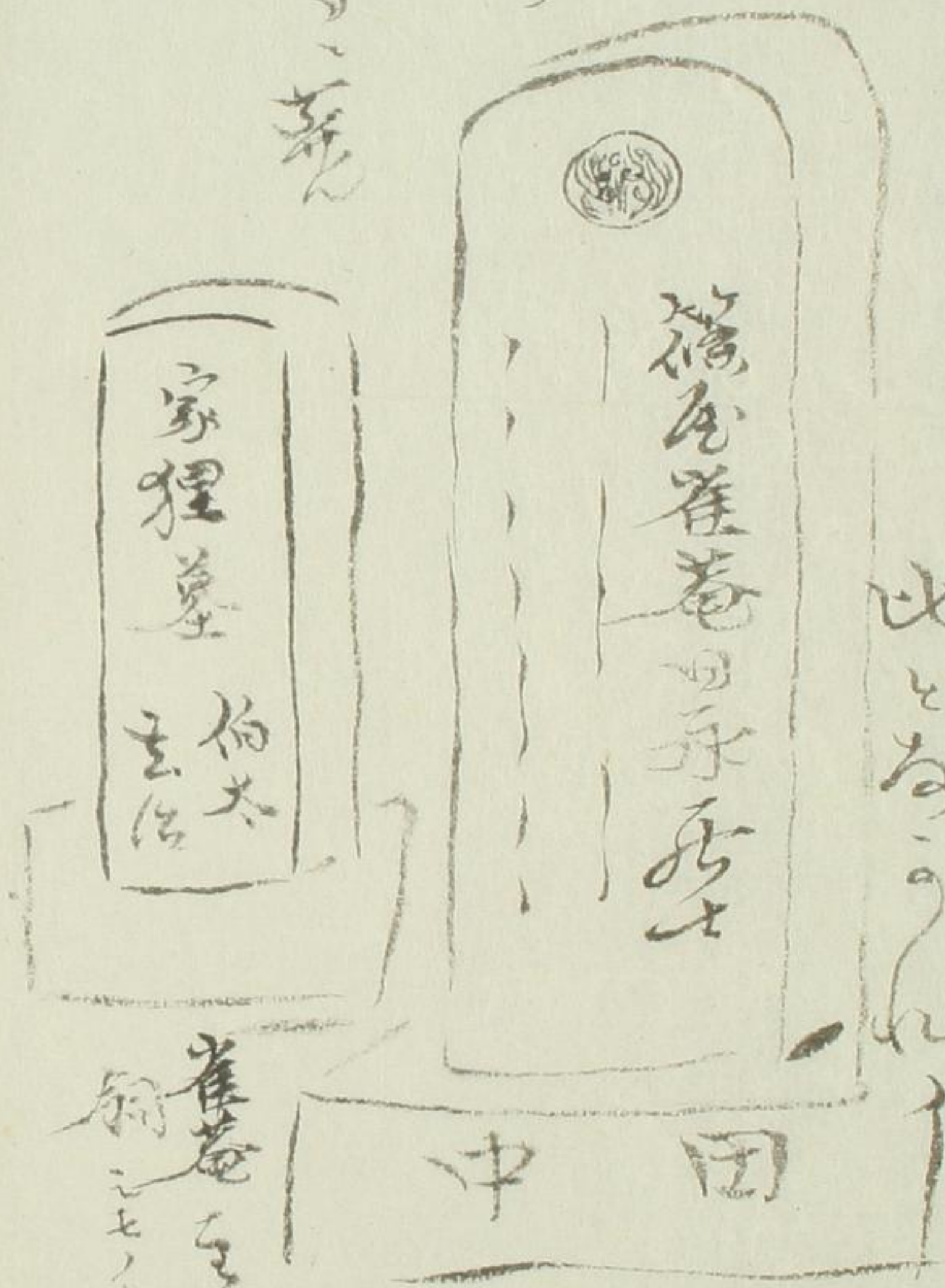
葬世
是寺人七五九
比とありぬ

房卷

寺

通所

通干山
古卷寺一葉



庚午年試心元

兼文園家

花子

白鳥の御殿

改字田南ニテ延焼セシトキ箱ノ藏セシ古書ヲ細見ラ見録
トシテ吉多所ノ贈レリト云フ

一翁ノ妻ハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
川吉ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
大娘トシテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ

一翁カカリケル其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
リニケル其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
菴ト記シタルモノモアリ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
テ加田ト謂フモノモアリ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
苗字ノ如クハ自所賜子ノ姓ヲ賜セシモノト信ス田中家ノ家
紋一丸ニ地キカモカカナリ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ

一過新の直巻考ニ布ニ改テ道流ノ條ニ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
也トナリシモノモアリ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
塔ノ巻ノ形牛セシモノモアリ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
又雀巻ノ事ハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
不便ニテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
茶ヤリ

一田中直巻雀巻ノ事ハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
又雀巻ノ事ハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
卷ニ手ヲ引カシキテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
云フ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
此巻其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ
(下男)ニ卷員シテ其ノ所カリケル其ノ子ヲ多親死後ハ其家トシテハナリニシテ其ノ所カリケル其ノ娘ニシテ一男ヲ生テ其ノ後ニ繼イテ其ノ

半抄
。若葉のふ片たふあ久絶す。慶應三年下願の兒川直盛の
考のふとまはな。漢教をせぬをり。明正二年正月に平家
にせり

。能文の末之。先達の書。明正二年甲子。明正の初。男女二人の
信を引進め。後。今。可。物。い。高。い。学。か。し。が。家。計。不。出。高。
と。り。本。は。成。南。千。信。可。回。甲。午。大。師。の。精。進。り。白。米。を。身。
中。解。つ。て。増。え。り。と。し。

。雀巻の婿男。能。り。り。清。の。精。の。入。と。な。し。ぬ。か。る。巻。の。小。後。
。中。の。家。文。絶。ち。り。善。達。寺。の。御。由。り。其。年。忌。供。養。等。
。本。家。中。源。壽。好。徳。中。の。五。三。三。の。言。り。
。能。り。初。め。書。の。向。新。可。回。中。新。無。事。の。娘。孫。と。し。ぬ。か。る。あ。く。
。幼。少。か。の。後。絶。ち。と。し。ぬ。甘。ぬ。は。あ。新。始。い。か。る。後。孫。の。子。は。巻。

云々。成。七。の。後。ち。久。七。娘。と。し。ぬ。の。娘。持。行。成。の。妻。に。
女。せ。り。

以上雀巻の小此の弱ちれば。可。り。と。し。ぬ。大。正。五。年。也。り。女。也。

嘉靖
三
世
相
三
世
相
三
世
相

明正三年同日のをも。嘉靖十九年。序。文。あ。三。世。相。
。本。の。要。本。の。弱。ち。り。三。世。相。の。唐。朝。同。師。意。天。
。能。り。他。と。し。ぬ。画。因。古。拙。而。今。是。ち。り。大。正。五。年。也。り。再。
。ひ。正。書。の。上。下。二。卷。本。也。弱。ち。り。持。行。し。ぬ。成。本。と。教。
。づ。え。に。下。の。新。萬。石。二。己。其。曆。九。月。吉。旦。書。肆。福。田。年。
。若。葉。一。枚。行。り。あ。り。成。本。の。上。巻。の。女。名。も。成。本。の。名。に。
。三。撰。新。本。の。文。字。も。然。り。込。了。点。も。正。名。号。也。し。

新園の
名木未結

自家秘本の明本との異を
強行のこれに原本より
ありたり其れ以前のもの
多し其の年多あるを
新園秘本に
大久保彦左衛門自注の如し
此の秘本の根元より
新園の二本根元
黒川七袴にちて當見しは
詩の古きはん

新園の
名木未結

新野の
講壇

大正五年五月十日
元来大津の
同日新野の講壇
その要点を

玄室の呼例

(元) 延晃(光)元年封元正月十八日吳歳在成

(靈元) 寶興三年兵樂鳥程所立靈元

(玄宮) 哀哉主人卷背有姓子民憂感以迄不寧

(岩) 元康元年八月造山廣壁切虎共

擲 (擲の銘より)

(冢擲) 大原三年七月造 壘吳興鳥程人營晏冢

(壘擲) 孔餘杭之壘擲

(壘擲) 義照莫上計壘擲

(壘擲) 元康二年大城而辰揚州吳興長城湖

破鄧育定里施晦年世先界之冢八
月十日新作壘擲

(序) 王屋序

城ハ元来外部トニアリ全片ノ初ムアラズ然シ一級ニ云フモ不當ト云
トニアリ全片ノ初ムアラズ然シ一級ニ云フモ不當ト云

塼名通例

(塼) 元嘉十五年作會稽張越建塼

(塼) 恭和三年作塼

(塼) 鳳皇三年施及作塼

(塼) 永平七年七月十日作塼

(塼) 〇〇月廿九日作塼

又建元元年八月作の銘あり
大原元康の年造る多し南北の
又建元元年八月作の銘あり
大原元康の年造る多し南北の

奔弛 大同元年 又梁の天監八年のものあり

博 繩形長方形あり

好七編まじりの形あり 又鳥の形あり 又鳥の形あり

横好

交字 隸書 亦の篆書あり

交極

交極 幾何學的増好者多し 亦人物あり

幾何學的斜格交極多し 鳥魚 山形 曲線形 等あり

交例

元康元年八月廿日造

甘露三年七月作

甘露三年七月作

永安七年鳥雅都疎

萬年永封 萬世無極

萬歲不毀 萬年不破

專に 鳥形 二ツ

大吉 大吉 子孫萬年 安樂

吉祥宜子孫 富貴萬年 長壽貴 傳世富貴



富且壽 天孫 嗣長 歿

萬歲無極 子孫千 常宣 王 大古二千石 至今 延

大原元年 歲在己申 世安未 大平 歲

天生 人 供奉 男子 千 作 埴 以 葬 父母 沃

萬歲壽 龍 而 虎 在 壁 右 壽 祀 左 白 虎

令子 賢者 在 父母 卒 次 葬 埴 以 祀

元嘉十五年 作 會 埴 張 勳 建 壽

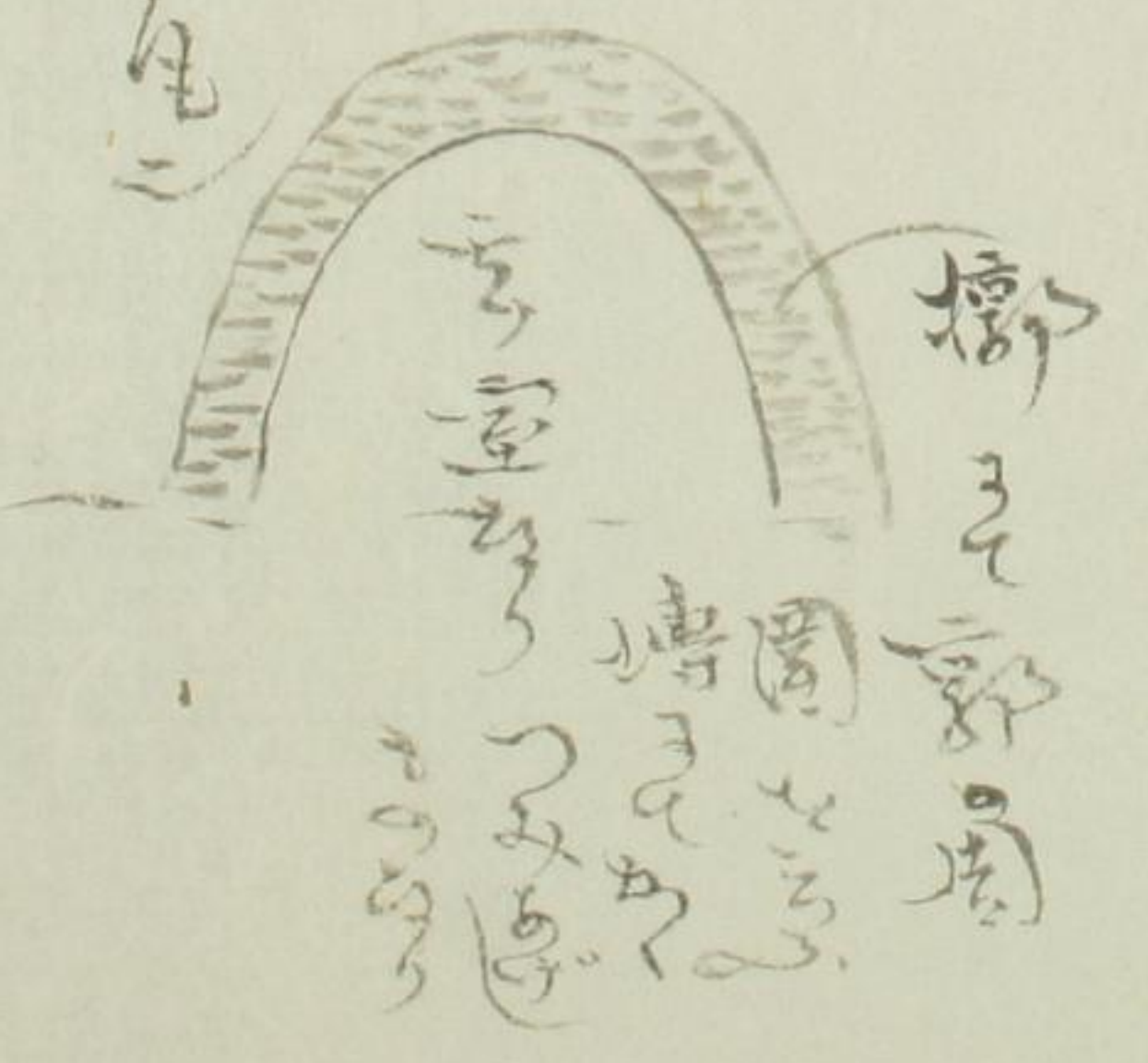
埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴

埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴

埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴

埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴

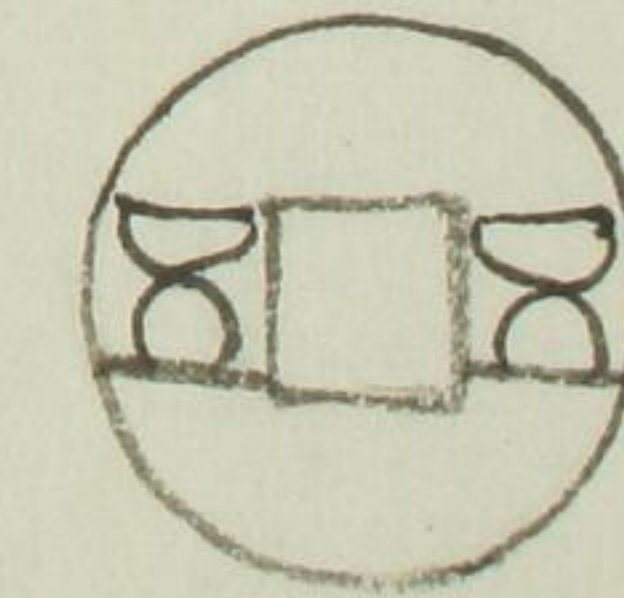
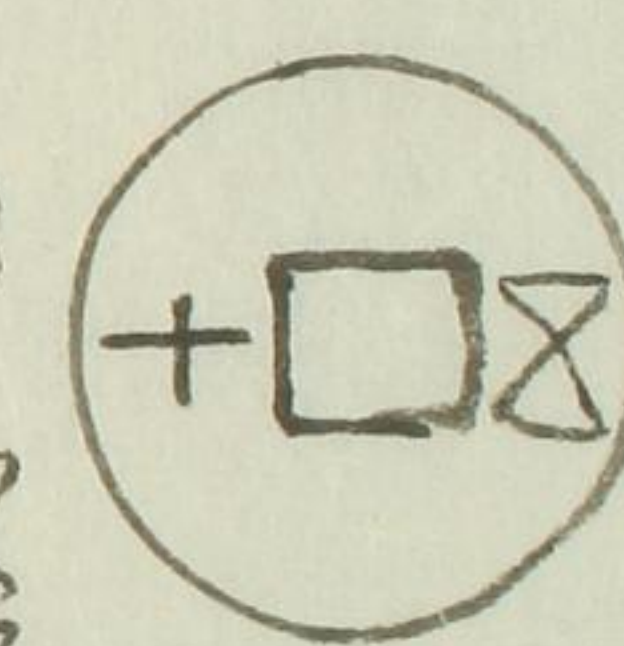
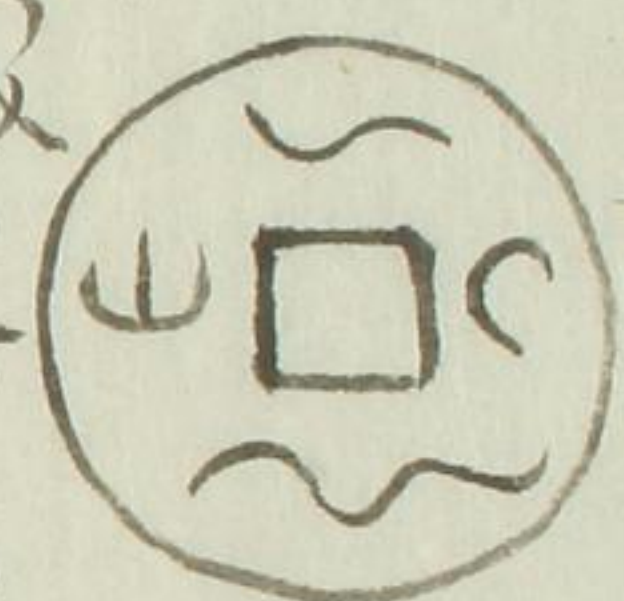
埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴 埴



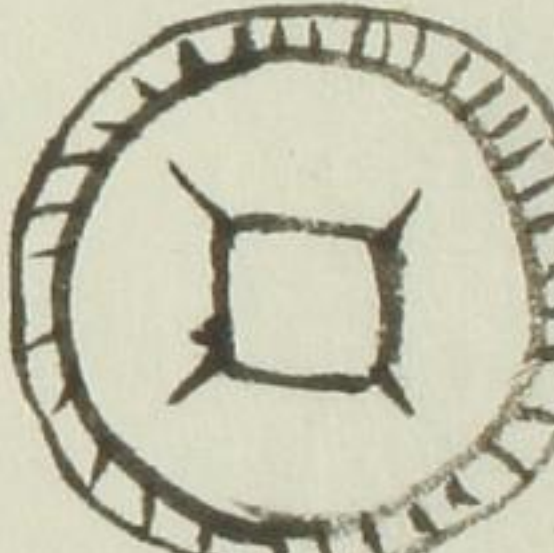
通書古書友

一急四冊二急四冊

專書
其或
大宗
其錄



晉書
元康
元興



二永
二建



元康
元興

日

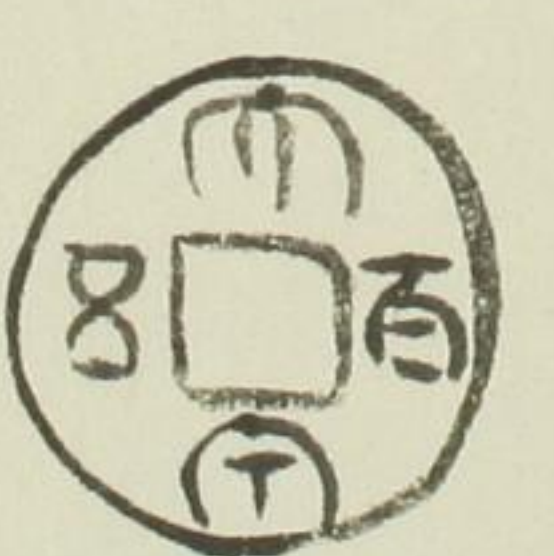
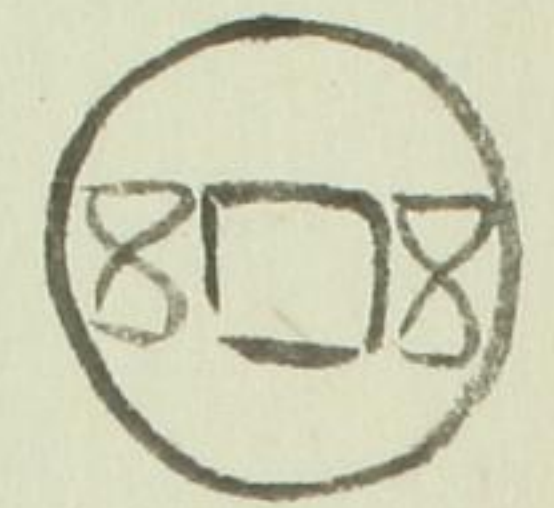
百

二西

東
西
南
北

臨淮符南先博

上虎額博



萬歲五銖銀

晉元康博以下
博國親所同也
萬歲五銖銀博
博也千燈之古

天明七年の
高直合

燕の勇は遠巻子と云ふ群鶴と云ふ日本地物標

天明七年四月廿七日
父別部 船由舟宿と云ふは福田の船宿と云ふ

大板 登壇 七十四
南溪 八十
正秋 七十八
永由 七十五
遠庵 七十五
北巖 七十八

天明七年の末年
二向 七十四として年々高直合十方中より下りしと云ふ

天明七年の
高直合

初八 天明七年八月十九日 没言年 八十九

二代 天明七年六月廿日 没

三代 天明七年三月廿日 没

四代 天明七年七月廿日 没

五代 天明七年七月廿日 没

武少以越の考まはし書き下りて大久保辺の地蔵
又 鑿虫の青梅乃菊娘先也

天明七年の
高直合

百廿年以來親言後わ斗二店有る其後今の冬に
住居しる山い底なり言保十三年十月十三日
有疎院殿の成知と大海の曲の覚とあり

場 枚見世

木下と名無事

百廿年以前雷の外木ヲ際當時柳屋御若也心中
箱居の砂多高い改昔右の砂は木の根向の其外
生茂りたる木のことも見世を柳屋の
大敵院の成り節のりる柳屋の右家も木下
と萬言下りたる由右箱居の孫後の所家の砂菜飯
の店せしむせ居と云別所砂今も無事電も木下
際柳屋見世も持来りの場枚今も無事方木下
用せ世削上の上細工右の枚とせし

是の百廿年以前枚九枚あり場枚見世の中より形見世
とせしありこの店一の段とあり今以て段店と
毎の敷きの裏紙をの五合とあり

長草餅

長草餅

大明院の七世の用達と云二十年前より百姓に
と柱木をさししものより油を餅餅り

長草餅

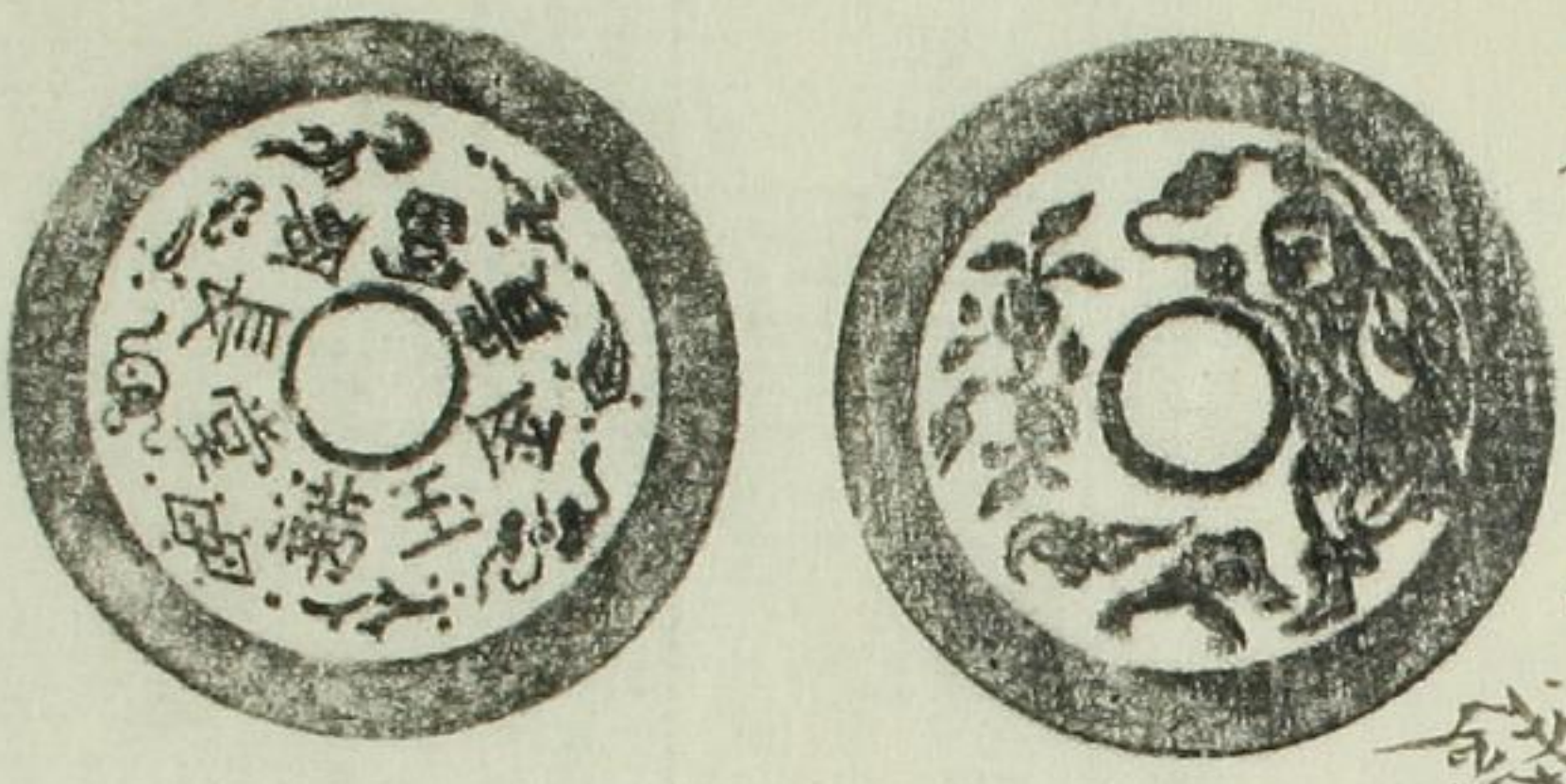
長草餅

長草餅

昔の随方門外角今大みのとふ所をのなまに餅
登園七高いまも餅を今住居の店も縁
と次竹敷七餅の餅所とあり餅見世

三つ竹清文蔵
 天祿招財童子
 三つ竹清文蔵
 天祿招財童子
 三つ竹清文蔵
 天祿招財童子

昔の黄檗山塔印
 天祿招財童子



三つ竹清文蔵
 天祿招財童子



天祿招財童子

昔の黄檗山塔印
 天祿招財童子
 三つ竹清文蔵
 天祿招財童子
 三つ竹清文蔵
 天祿招財童子

惠信院淨節寺貞女婦

室曆六年正月十日

屋棚より堂行者(元日)子回を無事とす

寛政十一年十月二日

(元禄七年)

又建婦の背取、元禄^成二年三月十日と刻しあり
又十方塔の影堂子回を無事の右像とす

享保十三年十一月吉日

千田新田

千田長兵衛吉照寺七方時建之

と臺石の刻しあり享保十三年七月廿九日の寛文十二
年の朱れり没年八十一方とあり然し享保十三年か千田新田の
前起年月に於て寺七方のの年號をあらわすと解せし生年月

不明なるの猶明べらるるをあらわし元禄七年月日

物石の元禄^成二年三月十日の少年時代なり

破の結婚當時の像を後年刻し高像と号す

置りしとあり右を命じたるものなり

元文銘の七通をせし二十四月のめとあり

又東京平輪集事書院のいしれ享保八年近江公氏無事

井籠尾高茂清くして元禄三年の經て村ありたり

の比千田の有りて村は名く寛政九年今村一橋家の新領に属す

い及び里谷又一橋領十有軒とあり

無事右像の享保十三年の年號、新田前起の年、あり

村とあり後より紀念右像とあり年とあり

為往生極樂也
四生皆成佛

(佛像)

實喜二年十一月
右願主 妙師 申心
大工 幸西

人念の

此の石塔は、東田の村にありて、
其の石は、石室の石に
なり

ハッハ較較
鞠の産地
其産地

將劍高き後第一名 較皮精義
鞠の種類 名所 田 説明
冬考才たり 書中ハッハ較鞠の田 説明 紅葉が
如く 細粒の中 交を云々 様 是の ちり たる
あり 細粒の ちり たる 較鞠 たる ちり たる
なり 又曰す 較の 者 上 石 一 葉 たる ちり たる
占城の産地 此 文 産 あり 親 粒 たる ちり たる
は 所 謂 あり 又 高 上 なる 氣 味 たる ちり たる
物 たる 較の 石 たる ちり たる ちり たる 共 古 なる
御物 たる 隆寺 露 盤 なる 中 あり
保元三年十月九日
此の石は、石室の石に
なり

法隆寺露盤

神奈川初名寺
愛宕明王光輝
の鏡

國寶となりし神奈川初名寺の護摩堂
愛宕明王精巧なるもの
光輝の御影あり 三寸余の徑を山形なり

永仁五年十二月
廿七日金澤寺

是作
火二九巡入道行胤
子息藤右衛門尉藤

未高 (高?)

輪王寺
の重

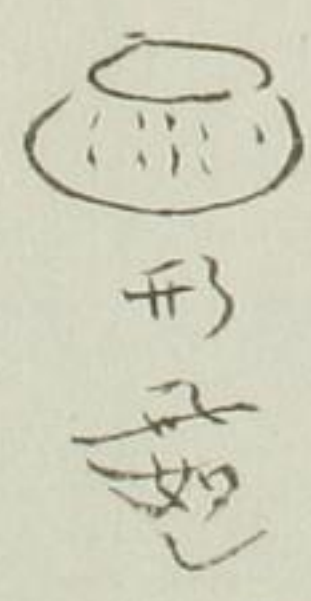
國宝蔭繪子前蓋裏
波の崎の如く三本ありて二羽の如
く形を成したるものなり 鏡蔭繪なり

女辨權現御室前子相一
安貞三年熾子正月晦日平助永

(輪王寺蔵)

石堂
の重

石堂國那麻耶を慶好
と上石堂寺をばり那波に
法行を常行す減法寺成り
建武二年二月八月



石堂寺を慶好と上石堂寺をばり那波に
法行を常行す減法寺成り
建武二年二月八月

十六の洞窟
刻の石

似乎道亮より物部館
納し善徳寺而久保天
藤子存り 善徳の門扉
に刻せしものあり精巧
無類のものを傳へ金工
深野姫隨下繪狩野
栄川といふ所なり

三又の埋
三年月

深川三又の埋立也
明和八年より寛政元
而年迄十九

年向地蔵堂ありしが初立寛政二年三月元の如く川とありし
也其芥子書をきりて埋立當時に立りて標柱に

明和八年六月十六日
大橋三股築立也

寛政元己所修示立

寛政元年十二月
大橋三股新埋立御手傳

秋元攝津守河部伊勢守

三股河永少と流せし也其河原の土と流し築立也其
安永二年丁丙の昔の築立也

双丸

双丸を築きし日の中丸ありし如くなりし其丸の土
年の如く築立の中丸ありし如くなりし其丸の土
いすの丸ありし如くなりし其丸の土

山泉橋

千葉縣本郷郡久住村山泉の山泉橋と云ふ大樹あり
周囲一丈八尺也其大樹の土に築立其丸の
大さ七尺又樹の高さ三丈五尺一重なり山橋なり其丸

意松

日即日向敏園に意松と云ふあり周囲二丈高三丈上を
意松と云ふあり其丸の土に築立其丸の土

田邊寺土景

田邊寺土景あり其丸の土に築立其丸の土
鎮護社 臥象巖 仙鶴洞 鶴洞
修竹林 三笑橋 涇泉系 雨華石 琵琶石
石經墳 兔禮園
千葉縣久住村久木名跡成田野長と成田好正とありし

左七 三月 右川御臺場築ク
 左安政 元 海岸の島固シ
 左二 十月 江戸大火地震
 左三 江戸中大風火形跡止
 左六 横濱之開港
 左五 江戸中ヨリ病流行
 左五 西の方へ福星出ス
 左六 新好端大鯉の墓
 左萬延 三月 外堀田雪中ノ戦
 左元 新門の火虎
 左元 印度渡りの火象
 左文久 二月 以下御門外拂境ノ戦

左二 七月 十号星雨ノ如ク降ル
 左二 六月 甲戌日迄東國は雨止カ流行
 左三 大和寺修ムノ儀止ガ
 左四 成子ノ田舎宮にセシメガ
 左五 重罪人ノ懲戒場 (井ノ口ノあなを築クニシテ)
 左元 西京ニ進駐シ
 〃 筑波山ノ修築止ガ
 〃 二月中内政ノ河内道
 〃 寺々ノ鐘を造ルノ事
 〃 慶應写真師カラス張ノ事
 〃 小以ノ種痘疫
 〃 十五代ノ辞職

慶應二秋
 三 神佛ノ守ル諸方ノ濟
 七 由リノ屋敷焼少
 長刃刃屋敷ノ取崩
 以戸中霧及一燈
 長刃屋敷ノ跡ノ名
 草加在ノ水死佛流行

明治元

左 左 左 左 左 左 左 左 左 左

正月

戊辰ノ大戦争

三月

三月廿六日 東下リ御鳳撃

奥羽ノ二國ヲ七ノ國ニ分ツ

海底ニ追廻ル電信ノ

各處平均の時計

ペシキヤノ西洋床

西洋種ノ豚羊養ふ

四月

上總郡ノ海岸ノ大砲

大井川ノ船渡ニ成ル

編ミテ今ノ世羽合

華士族子及ノ髪切

五月

東台ノ大砲戦

十三日 船橋市河ノ砲戦

日々改正ノ御布告

毎日配達ノ新聞

明治二

左左左左左左左左

貨紙幣、通用金

諸國城々差上

青江戸改東京流

吉田橋、鉄作

和泉橋、大橋渡

諸屋敷、引掛

築地海軍の小火艦

陸軍、大訓練

一時、三時迄、打鐘

武家心、新刑町

國々、蘭取掛

利根川、破れて、改革大水

左五燒

家々洋式ヲ巻

左左左左左左左左

西洋服、着用

官員、月俸

辻番形、取掛

奥羽越、戦争

蝦夷地、開拓

人力車、往復

内外、テ、ムラ、カ

佛心、神社、五退

小金ヶ原、開拓

諸會社、日印、ワラク

西洋料理、家

小僧、或、小、石、車

仁、ヨリ、内

明治三
左
左
左
左
左
左
左
左
左
左

追々所々、自身番取拂
新橋より横濱迄、鉄道始
理非々、糾々裁判所 出来
吉原金籠棲今様、舞
公立和立の学校開
牛肉の賣り、肉店
車ダ賣歩、諸高人
三橋で取た双頭の赤鯉
島中氷賣の島人
新橋の鉄造、カキ
上野山内、養育院
海軍の水軍監官

左
七月

戸田川破れ、人多く死す
東京三十六見取取崩
全通の貸付會社
うら子洋商の糶賣
道中、舟の敷前路
わさから所の島社
疎尾造の島家
三筋、分の往来
佐賀孤韓黨追討の騒
各区内、板の區務所
新吉原、土勢棲出来
真崎の松の火木一夜に折

左
八
燒

明治四

明治五

二月

三月并諸藩通商
 乗合馬車新橋
 國立銀行石、五階
 市中大通り瓦敷塔
 大湯曆發行
 平民苗字名
 免流行して大金の賣買
 出家の肉食妻帯
 鑑の渡し格と成り
 牛の乳搾り
 道灌山のほろめり
 寺院神社の説教所
 南京嵐の流行
 五六税々々

明治六

三月

三月月始めの新月
 東京府内の新芝居座
 日本製の毛織物
 市中巡査の棒
 家務何人の門口札
 内外へ達する郵便局
 赤羽根水天宮から引物
 公事紙おせ扱ふ代書人
 銅板の因画
 横須賀の製鉄所
 家禄奉還の公儀心
 大區小區ノ界別

明治七

冬

秋

十月

春

祭日の日の丸旗
萬世橋

日本橋の三筋にゆか。

芝上野両所、東照宮

梅毒の検査

遊女の解散

出火、湯場のポンプ修理

常少あそびの大会

湯神社の女子札

東京聖堂博覧會

身代限りの張札

皇太子遊覧の御會

東京府外ハヤシの墓地定る

坂売所の米市場

小坂の坂を成る坂成一里おと

改築場

蓬萊場

西洋造の院者府館 三井ノ競ッ上ッ五階

ベニキぬりの狩集の便

歳多非人の平民同等

府下の温泉場

石板の人物圖繪

函館の氷會社

写真取次の見せ

明治八

春

半元服の權書
諸國小傳覽會
臺灣方面の軍
貸座敷
新聞の錦繪
和製の西洋紙
西洋字の眼鏡
東國の北國の出
京橋
海運橋
江戸橋
永代兩國の長橋

世に
出

ミスミ

二月

界紋印紙粘用
火元志らせの張札
藝人高人税金納
戸田川の板橋
名古屋の蘇東系
上野山王山の招魂塔
上中下の等々

明治九

國中一般廢刀の布告
一尺八寸の川人國の老人
荒和橋

常盤橋

近年

蒸気仕掛の秋登
妻の高今の駒下駄 廿又と一田中女也
西洋家家のガラス障子
唐系入の唐絨織
近世史略の講談

以下等とあり物多きを市井のとも考ふるものなり

諸國蝸牛の童謡

諸國蝸牛の童謡

東京

「まじくつら 陽にで びんが あるから 角だ
せ 椀が せ 快箱 だー せ

甲斐

「めーめんじよ めーめんじよ 角を だせめーめんじよ
角を 出さぬが 殺すぞ

下総

「おばくおばが 家が やけから 棒持つて いて来ふ
椀を 持つて 来て 出な けら 焼ふぞ

常陸水

「まじくつら くの 垣の下に びんが あるから
角たーと 見せら 検出して 見せら

伊豆

「まじくつら の だせ やり 出せ

角のうらうらうとやううか

土佐 磯川

出 ^{かた} ^多 角がせよ 焚くも 焼くも 喰はれん

出 ^雨 雨も 吹かぬけん 角とと 出せよ

出 ^中 中 虫が 家が 焼くも 早ふ 起るも 水かぶせ

出 ^早 早 鳴の 先き

出 ^紀 紀 甲 出にや 尻つめら

出 ^左 左 角が 一 角だし 角を ださぬから 庄屋とんさ

出 ^長 長 門 出にや 尻つめら

まづ 一 角を 出せ 子を出せ 角を出しや

播 刀 一本 買ふと やる 出さにも 尻から 火をつけるぞ

伊 後 西 修 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^左 左 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^山 山 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^左 左 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^左 左 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^左 左 出にや 尻にや 尻つめら

出 ^左 左 出にや 尻にや 尻つめら

伯耆

丹 一 角がせとて まくらめしよー

喜 鳥

一 角をがせ角を 出さずは 奥の口 / せよ

大 湯

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

登 久

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

下野

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

越 後

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

上 総

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

三 河

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

伊 勢

一 角をがせとて 出さずは 奥の口 / せよ

伊勢田の牛

ぢんじこさい出せしせ ぢんじこさい出せしせ 大鼓のし

並に諸子童謡大鼓のしとて又無業の曲とて「だんらー

く角出せし角出せしとて又無業の曲とて「だんらー

越後のを同じして小舞のしとて又無業の曲とて「だんらー

角七たせめめじよ 角がせめ、んどよ

えんらのまを謡ひとて童謡の角七たせめ、んどよ

しとて又無業の曲とて「だんらー

里謡集始末所載 堀牛 童謡

新島縣 北浦 京郡

堀牛たけうしによく角出せ 角たせめ、お寺の鐘に持て

長野縣 下木の郡

だいらく 角出せ だいらく

高知縣 幡多郡

かたつむりく 角出せ 河原の鐘が 豆を打つて食ふ

右の如く前記のものを今一あれが略しぬ

前記の伊豫山及淡路のむらじり 大蔵流の對言出

はと明ふる 鐘は古の童謡と見

の節に堀牛とてあつたのいぢり

主 是れは昔りに伊豫山及淡路のむらじり 某果敢て出度以祖父の

きく持てのなまが 是れ堀牛とて進上給せが 猶くの書令下

所て甲州の諸海を思ふに、
きつと、
松葉姑、
甲州、
見ゆ、
あれ、
店、
赤、

甲州、
世、
見、
と、
荒、
中、
画、
と、
病、

共古日錄參始考

甲子年正月廿三日



Handwritten calligraphy in cursive script (caoshu) on a multi-colored envelope. The text is arranged in several vertical columns, including the characters "母上" (Mother) and "下" (Down/Bottom).

